

人類学研究支援環境 DWB による祭礼調査資料の運用

—多様な視点を許容する祭研究—

岩谷 洋史
神戸学院大学地域研究センター

本村 康哲
関西大学文学部

森下 淳也
神戸大学国際文化学部

川村 清志
札幌大学文化学部

川上 聡
神戸大学大学院総合人間科学研究科

大崎 雅一
姫路獨協大学法学部

データカルチャリングの実現性を検証するために、明石の稲爪神社秋季祭礼の人類学的調査で収集された祭礼調査資料のデジタルアーカイブを対象とするデジタルワークベンチを構築した。このデジタルワークベンチでは、デジタルアーカイブの正規化されたデータをデータベース上で引用し、自由な再解釈可能なデジタルワークベンチを運用した。この結果、デジタルワークベンチ上で、データの再解釈、再構造化、客観化を実現することが出来た。

An Application of Digital Workbench to Festival Research Materials for Anthropological Study

—Festival Research Including Multi-View Points—

Hirofumi Iwatani
Center for Area Research and Development
Kobegakuin University

Yasunori Motomura
Faculty of Letters
Kansai University

Junya Morishita
Faculty of Cross-Cultural Studies
Kobe University

Kiyoshi Kawamura
Faculty of Cultural Studies
Sapporo University

Akira Kawakami
Graduate School of Cultural Studies
and Human Science
Kobe University

Masakazu Osaki
Faculty of Law
Himeji Dokkyo University

In order to examine the possibility to realize the “data culturing,” we constructed a digital workbench system on the materials gathered through the anthropological research on the autumn festival of Inazume Shrine in Akashi, Hyogo, Japan. On this digital workbench, the flexible reinterpretability of the data was accomplished by referring to the normalized data stored in the digital archives. Through this examination, we found the data were made reinterpretable, reconstructive, and objective on the workbench.

1. まえがき

これまで我々は、フィールドワークにおける一次資料の共有と更新、さらには現地との双方向的な民族誌記述を推進するためのデジ

タルワークベンチ(DWB。以下これで表記する)の構築を提唱してきた。

そもそも文化人類学ではその主要な成果を示す民族誌について、激しい批判が行われて

きた。そこで指摘された調査者と被調査者との非対称性や民族誌に付与された権威を相対化する試みとして、インターネットによる現地との民族誌資料についての対話や web 上での民族誌の公開が提唱されたり、試験的な試みを実施されたりしている[1]。これらは、インターネットの特質に注目し、それらを利用することで、「民族誌という固定したモノに決して収斂すること」のない、「開かれた民族誌の手法」が提唱されている[2]。

しかし、これまで web 上に公開された民族誌資料の多くは、研究者によって検証され、きれいに整備された状態で提示されている。つまり、そこで発信される内容は、「著者」である民族誌家の視点によって固定されており、たとえそれらが「単線的なストーリーに沿って配置されるのではなく」ても、「断片的情報を付加してデータベース全体に寄与することができる」かどうかは、疑問と言わざるを得ない[3]。

本研究が第一に目指すのは、上記の研究が提唱し、部分的には実施されつつあるオンライン上での民族誌資料のデジタルアーカイブの構築である。それに加えて本研究では、そのような「民族誌」が構築される際の視点そのものを相対化する作業を可能にするモデルを提示してきている[4]。そして既成の民族誌が構築される際の様々な問題を考慮しながら、現地の視点や他の研究者の視点をどのように反映させていくのかという課題に答えようとする試みである。

本稿では、試験的に構築してきた DWB の運用を通して、そのユーザーであるフィールドワーカーの立場から浮上してきた課題と DWB のモデルについての技術的な課題を検証する。

2. oMATSURI データベース

神戸学院大学では、文部科学省推進「学術フロンティア」事業として『阪神・淡路大震

災後の地域社会との共生をめざした大学の新しい役割に関する実践的研究』という共同研究プロジェクトをおこなっている。このプロジェクトの文化人類学分野では、明石の稲爪神社秋季祭礼（10月第2土曜日、日曜日）を2002年から現在に至るまで調査を継続している。

この調査においては、祭礼当日に稲爪神社で行なわれる神事だけではなく、「大蔵獅子舞保存会」、「大蔵西之組獅子舞保存会」、「早口流し保存会」などといった各祭礼集団、および保存会以外の大蔵谷の各町内会などが行う行事も対象としてきた。調査にあたっては、祭礼に先立つ準備段階や練習段階から、祭礼後の動きなど関係している行事のすべてを対象にしており、関係者へのインタビューや行事の観察、および映像化をおこなっており、過去のデータが蓄積されている。

都市祭礼のような広範囲な事象を対象に共同研究をおこなうと、様々な問題が生起する。複数の調査者の分担による共同研究によってデータ収集していると、基本的な情報の共有ができていないといった問題が起こってくる。さらに、この祭りのような都市祭礼では、祭礼や行事が広範囲にわたり、またこれらが異なる目的を抱いた人びとによって担われていることを特徴としている。したがって、個々の調査者は、それぞれの視点から、多様な人々がかかわっている祭りの一断面を観察しているにすぎず、その結果、このような共同研究では対象もそれを観察する視点も多様な資料が収集されるのである。

したがって、これらを整理し、かつ調査スタッフ間で情報を開示・共有が可能なプラットフォームが必要になってくる。そこで、第一段階として複数のユーザーが絶えず情報を共有し、参照できるデータベースを構築した。

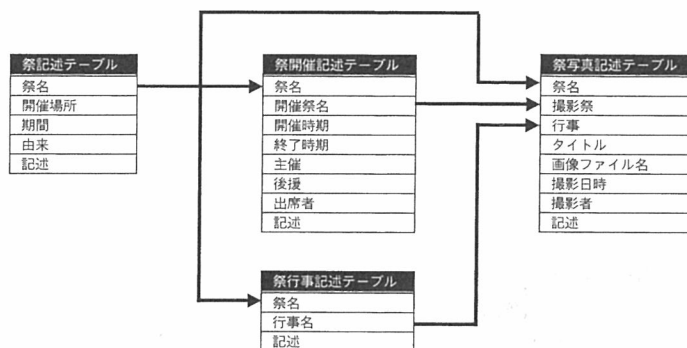


図1 oMDBのスキーマ

3. oMATSURI データベースの構造

デジタルアーカイブとして写真データを格納する oMATSURI データベース(oMDB)は図1のような構造を持っている。祭のエントリーのスキーマを中心に、開催された個別の祭を記述する祭開催のスキーマと祭の持つ行事を記述する祭行事のスキーマを用いて分類を行い、その分類の基に祭の写真を格納するスキーマを位置づけている。また、祭の演者の役割に注目した祭演者スキーマや祭に使われる小道具、大道具を記述する祭道具スキーマなども検討している。この他に、祭の資料として集められた文書も格納できるように準備している。

oMDB は Web アプリケーションとして実現されているため、マルチメディアデータは、データベースに直接、格納するよりもその URI を格納することとして、メタデータスキーマを記述するに留めている。そのため、ビデオデータや祭調査の聞き取り資料なども、インターフェースさえ整えば、同じ枠組みで格納される。

このような大まかな枠組みでデジタルアーカイブが設計されている理由は3つある。1つは資料の詳細な分析に時間をかけるよりもできるだけ生の状態に近いものを早くアーカイブに格納することを目的としている。

もう1つは、一つの祭の詳細のために用意された特殊なアーカイブではなく、幾つかの異なる祭データが納められるように準備されているためである。

最後の理由は、本論文の目標である DWB を活用することを前提としているからである。たとえば、不完全な記述や分類があっても、後にそれを修正できる枠組みが控えているため、制約の少ない構造設計を許している。

oMDB の編集システムにおいて検索された写真データの例を図1に示す。この例では、キーワード「だんじり」をタイトルに持つ写真を検索したものである。表示システムは、検索の際に表示用の項目を自由に選択できるようになっており、結果は他のテーブルのデータを結合した1つのビューとして表示される。

4. 支援環境としての DWB

oMATSURI データベースでは、調査者が作成する客観的なデータにくわえて、祭りの参加者や当事者としての立場からの情報も取り入れることをめざしている。このようなシステムは、人類学や民俗学における従来の調査方法論に対する批判に答え、被調査者や民族誌の読者にも閲覧可能な民族誌資料のデジタルアーカイブにも通じるものである。

このような用途に利用するプラットフォームは、デジタルアーカイブと呼ばれている。

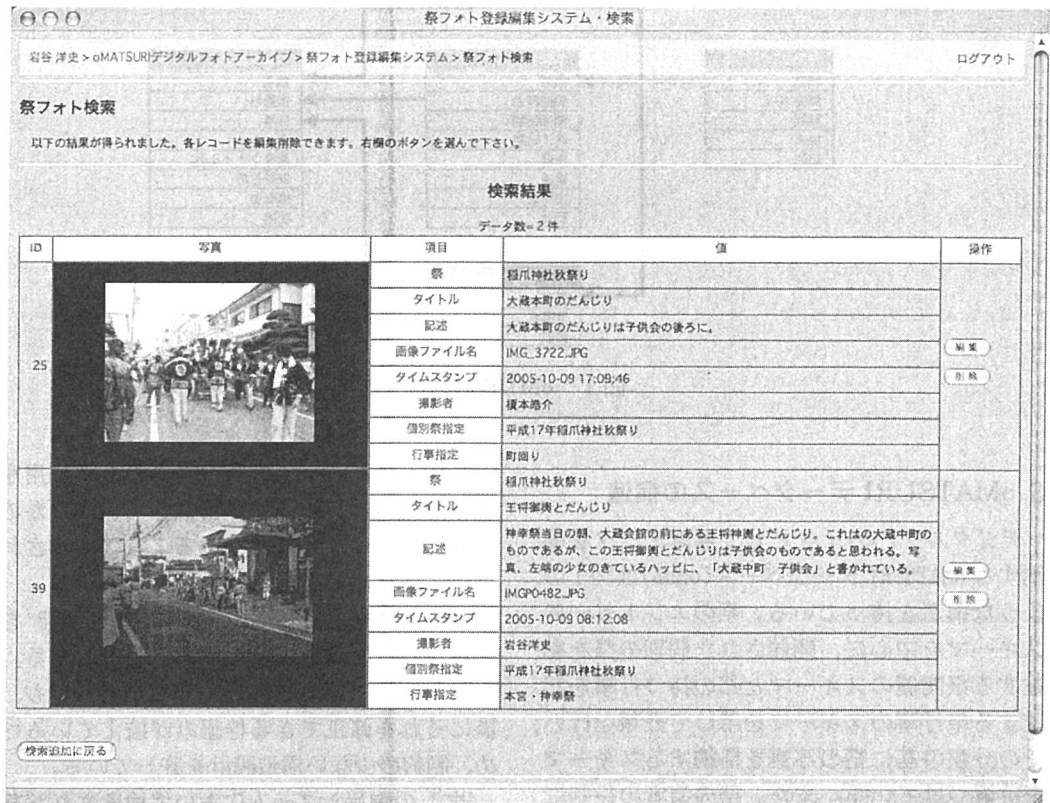


図2 oMDBの検索結果

デジタルアーカイブでは資料をデータベースに格納するのであるが、データベースの構造の持つ完全さ故に、ある体系に基づいて標準化された資料しか格納することができない。

この問題は人類学の問題にもつながるのである。そもそも人類学における民族誌の記述においては、調査対象の全体的把握を伝統的にめざしてきた。しかし、全体論的なアプローチを保障する調査手段や行程についての共通見解というものはなく、調査者個々人の「名人芸」によって成り立ってきたことが現状であり、すべての収集された資料を客観的なデータとして反映させることはできないと論じられている[5]。

デジタルアーカイブでは、ある体系に基づいたデータは追加は可能であるが、新たな知見に基づいて途中から体系を変更することは、現状では不可能である。本研究で構築した

DWB では、正規化されたデータが格納されたデータベースを再利用・再解釈してできる土台を提供するものである。

5. oMATSURI ワークベンチの構造

DWB では、生成されるデータベースのレコードは、既存のデータベース（デジタルアーカイブ）のレコードからの引用（リンク）と DWB の利用者の用意した属性を併せ持つ構造である。本論文の oMATSURI ワークベンチ (oMWB) では、oMDB のレコードと一対一に対応した oMWB のレコードを利用者に応じて生成できるように構造を設計した。つまり、User_ID をユーザ識別キー、oMDB_ID を oMDB の識別キーとすると、(User_ID, oMDB_ID) のペアがキーとなる。DWB では一般的には、ユーザが自由にリンクのリストを自分のレコードに含め

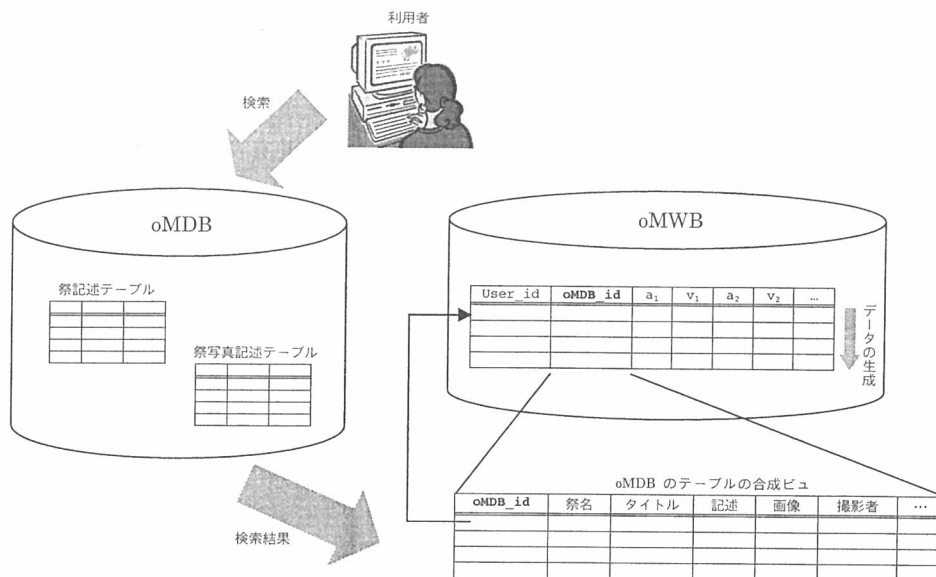


図3 oMWBのスキーマ

ることができるが、複雑なものになるため、ここでは簡略化した。ユーザIDによってユーザの視点を与え、ユーザ毎にoMDBの個々のレコードを拡張するという見方を採用したことによる。

ユーザIDをUser_id, oMDBのリンクレコードをoMDB_id, ユーザが与える属性 a_i , 値を $v_i(i=1,2,\dots)$ で表すとすると、oMWBの格納するタプルは、

$$((user_id, oMDB_id), (a_1, v_1), (a_2, v_2), \dots),$$

となる。但し、oMWBではこの属性 a_i もまた、データとして利用者が生成する。

oMWBでは、基本的に利用者が自分の視点でoMDBを検索し、検索結果から、1つのレコードを選び、自分のデータを属性名、属性値のペアで設定する。属性を設定されたデータが、その利用者のoMWBのレコードとして登録される。従ってoMDBの検索からレコードの選択、oMWBのデータ生成という流れになる。

oMWB自身の検索は、幾つかの選択がある。(1)ユーザの視点に基づくoMWBの検索、(2)oMDBとoMWBの統合検索、(3)ユーザの視点を横断するoMWBの検索(oMWB全体の検索)である。特にユーザが協調して作業に当たる場合にはこの視点を横断する検索は重要である。

oMWBの検索は検索項目によってoMWB固有の属性の検索とoMDBのリンクの検索の2つに分けられる。リンクの検索は2段階で行われる。まずoMWBのリンクされているレコードを特定し、そのレコードの集合に対して、oMDBの検索を実施する。その結果のoMDBのレコードから対応するoMWBのレコードを特定して、結果として返すことになる。

6. 祭礼調査での運用

各ユーザーは各々の関心によって、画像データを入力する。初期的に、デジタルアーカイブのオリジナルな枠組みを与えれば、順次、利用するたびに、データベース構築が複数の

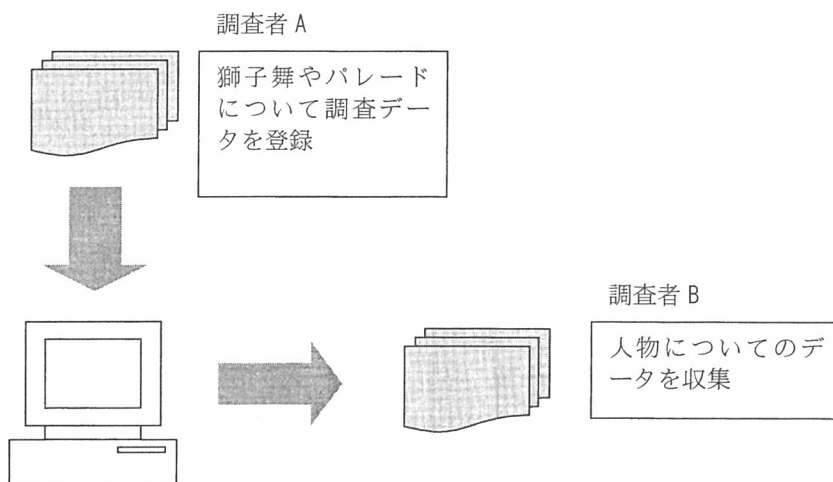


図4 再解釈のイメージ図

ユーザーのもとで行なわれることになるが、このデータベースは単に情報の開示と共有だけを目的としているわけではない。

データを入力するユーザーは、何らかの視点をもって入力する。だが、たとえそうだとしても、このデータベースそのものは、あるなんらかの視点によって構築されたものではなく、あくまで情報のプールになる。それぞれの意図のもとにプールされていく総体となるデータには、統一的な意味を見出すことはできない。情報が改めて有意味なものになるのは、ユーザーがそれを利用するときである。たとえば、人間の身体や行為についての行動学的視点で入力されたユーザーのデータは、祭礼研究の視点をもっているユーザーには、別のものとして意味が付与される。ある視点で入力したユーザーの意図とは異なり、データそのものの意味が読みかえられる。そして、ユーザー各々自身によって有意味なデータとして現前するようになってくる。祭礼調査資料を運用して具体的に以下のようなことが確認された。

(1) データの再解釈

調査者 A が行事としての獅子舞やパレードについて調査をおこない、その写真データを oMDB に登録していった。これらのデータには、行事の生起する順序と空間的な構成が記載されている。このデータには集団としての人間の振る舞いが記載されているだけである。

調査者 B は祭に参加する個々人に焦点をあて、特定の人物が祭のどのような局面で、どのような行動をとっているのかを観察している。調査者 B は oMDB にアクセスし、入力されている写真の中から、追跡個体を発見してゆく。この過程が oMDB に記録される。

ここから、調査者 A が観察していた祭祀集団が行う行事の資料から、調査者 B は自らの対象としていた観察対象の行動を証拠づける資料を得ることが出来た。

(2) データの再構造化

入力する画像に関しては、どこを焦点とするのかはユーザーによって相違する。調査者 A が、「大蔵谷獅子舞保存会」と「大蔵谷西之組獅子舞保存会」の両保存会の獅子の踊り

検索結果


ID	写 真	項 目	値	操 作	
201		演 目 名	あぶ追い	引用	
		撮 影 者	川村 清志		
		撮 影 場 所	稲爪神社山門前広場		
		撮 影 日 時	2004年10月9日		
		記 述	川村 清志		アブ追いの様子。獅子が振り向き、背中のアブを追いかけている様子を示している。この写真では、少し分かりにくいですが、本来はカヤと獅子は、向かい合っているようにして舞うことになっている。
			岩谷 洋史		写真ではわかりにくいですが、アブ追いにはダイナミックな動きが必要とされる。その動きによってはじめて獅子を、ある意味、生かすことができる。初心者の動きは、そのダイナミックさにかけてしまう。

図5 データの客観化の表示例

方を詳細に比較分析しようとして、宮入奉納時の両獅子舞演目の一連の写真を入力した。そして、「大蔵谷獅子舞保存会の宮入」および、「大蔵谷西之組獅子舞保存会の宮入」というタイトルをつけ、各々の画像にたいして記述を行った。調査者 A は、獅子舞そのものよりも、獅子舞をとりまく舞台装置や観客に興味の対象があった。いっぽう、調査者 B は「宮入」における獅子舞の演目と踊り方を調査していた。

調査者 B は、oMDB を「宮入」で検索し、ヒットした写真の中から獅子舞の演者についてのデータを得ようとした。これらのデータを時間軸にそって配列するために必要とされる分類属性と順序属性を oMWB で記述した。

(3) データの客観化

同じテーマで観察している調査者 A と調査者 B の調査結果を照合することが可能になる。oMDB から両者が取り出したデータとその意味付与の比較が oMWB 上で展開されるのである。このような環境は研究のみならず、教育の場面でも有用であろう。

また、人類学で問題となっている、調査者と被調査者との非対称性の問題にも、一定の解決策となることが期待される。これらの資

料を祭りの当事者に対しても公開することによって、演じ手の意図というもつとも主観的な内容についても、コメントをきひ出すことが可能となる。これは、本研究が意図する双方向的な民族誌の作成においては、きわめて重要なステップになると考えている。

7. おわりに

我々の提唱する DWB では、利用者によって既存のデータから読み取られた新たな知見をアーカイブへと追加・格納することによって、システム内でデータが培養され、増殖してゆく。これは、既存のデジタルアーカイブに蓄積されたデータに、人間が新たな意味を与えて構造化してゆく過程であり、これをデータカルチャリングと呼んでいる[6]。従来のデジタルアーカイブではデータを蓄積することが主眼とされてきたが、DWB では、アーカイブから得られた新たな知見をアーカイブへとフィードバックし、格納することができる。多くのデジタルアーカイブが構築されている現在、更に多くの研究者によってより富んだものへと常にデジタルアーカイブ自身が進化し続けることが可能となると考えている。

参考文献

- [1] 太田好信『トランスポジションの思想－文化人類学の再想像』世界思想社、1998.
- [2] 湖中真哉「民族誌の未来形へ－オンライン民族誌の実践から」『民博通信』102、6－8、2003.
- [3] 飯田卓「異文化をプロデュースする－テレビ番組と民族誌」『民博通信』102、2－5、2003.
- [4] 本村康哲，川上聡，川村清志，森下淳也，大崎雅一，「人類学における研究支援環境としてのデジタルワークベンチ」，pp.219-226，じんもんこん 2003.
- [5] E. リーチ，長島信弘訳，『社会人類学案内』，岩波書店，1985.
- [6] 本村康哲，川上聡，川村清志，森下淳也，大崎雅一，「人類学研究支援環境のためのデータモデル構築」，pp.219-226，じんもんこん 2004.